様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６３３４

研究課題名（和文）18・19世紀の被膜児伝説からみた産科医療の向上と生命観-日本とイギリス

研究課題名（英文）Correlation of the Legneds on Children Born with a Caul with the Improvement of Obstetric Treatment and a View of Life in Japan and Britain during the Eighteenth and Nineteenth Centuries

研究代表者
内野　花（UCHINO, Hanna）

大阪大学・ＣＯデザインセンター・招へい教員

研究者番号：２０５８６８２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：被膜児伝説信仰の衰退の社会文化的背景の一要因として、日本では産科技術の向上およびその一般化が、英国では産科医療の向上以上にライフジャケットの性能や船舶技術の向上による海上交通の安全化および鉄道交通網の発達が、それぞれ存在することが判明した。従来の研究では、現存資料の少なさゆえに、日英ともに被膜児伝説の衰退要因研究はなされてこなかったが、本研究で日英それぞれの伝説衰退の一要因を明らかにすることができた。また、今後の課題ではあるが、日本の羊膜と武具との関連性、イギリスの海上交通の安全化と鉄道交通網の発達による運搬・移動の簡易化と信仰衰退の相関性について、ひきつづき見ていく。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の被膜児伝説研究は、通常出産に比べて出生児死亡も多い被膜児を主題として扱うため、研究そのものが少なく、異常出産児を研究対象として取り扱うこと自体、分野を問わずタブー視するきらいがある。しかし、本研究は、被膜児の文化背景、とくに信仰の衰退要因を社会文化面から扱い、医薬のみならず、思想や服飾品、交通網など多角的視点で分析したため、分野の枠組みにとらわれない研究方法を示すことができた。
また、定期的に国際学会において研究発表をおこなったため、日本的な緻密な研究手法を提示するとともに、将来の研究基盤となりうる人的ネットワークの形成もおこなった。

研究成果の概要（英文）：In previous research, there were few remarks about between the improvement of obstetric treatment and legends on children born with a caul and about the reasons for the decline of belief in these legends, since there are few materials related these legends left in both Japan and Britain. Besides, there was no research which focused on the reasons people stopped accepting these legends as true.
In my research, however, I found some factors which are connected with the decline of the belief in these legends in two nations: a generalization of the improvement of the obstetric treatment and its diffusion in Japan, in Britain the improvement of efficiency of life vest, strengthening of the safety of sea traffic because of the improvement of marine engineering, and development of the railway system.

研究分野：医薬文化史および香り文化史

キーワード：被膜児伝説　産科習俗　産科医療　生命観　民間信仰の衰退と技術発展の相関性　比較文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

被膜児とは「通常出生児とは異なり、羊膜に包まれたまま、またはその一部が身体に付着した状態で娩出された児」を指し、古来、西欧社会では幸運や異界のシンボルとされてきた。しかし、異常出産の 1 つでもあるため、被膜児は通常出産に比べて出生児死亡となる危険性が高く、かつ分娩時に被膜児と確認できた段階で医師による羊膜切開および除去が行われるため、発生率や発生原因など不明な点が多い。そのため、医学分野では、生命倫理の観点から研究対象にすること自体がタブーとされている。また、歴史学の 1 つである医史学においては、古来各国の民間伝承に被膜児がその姿を現していることは認知されてはいるが、他の事象と比べて文字資料が少なく、民間伝承という非・歴史書が主な記載先であり、かつ正常出産以外は扱うべきではないといった「常識」に基づいた暗黙のルールから、被膜児伝説を研究対象や媒体として扱うことは忌避されてきた。

本研究の研究代表者は、部分被膜児として生を受けたこともあり、大学院在学時より、生薬文化史や香り文化史とならんで、被膜児伝説を研究対象としてきた。また、国内外の医薬史および科学史分野の学会に参加し、研究発表を定期的におこなうことで、医療技術や文芸作品などの社会文化事象を研究媒体として被膜児伝説研究をおこなっている研究者はもちろん、被膜児伝説研究そのものが現在ほぼ皆無であることを確認してきた。また、国際学会に参加する日本人研究者が非常に少ないことから、日本の研究力および日本文化への誤認や偏見があることも痛感してきた。そこで、産科医療が躍進した 18･19 世紀における、当時の産科学先進国であった日本とイギリスの被膜児伝説の概念変遷と産科技術の向上や生命観の相関性を分析し、その研究成果を国際発信することを構想するに至った。

２．研究の目的

医史学研究における産科医療および産科習俗文化の研究は、産婦人科という独立した科が存在するにも関わらず、産科の技術発展史を除くと、ジェンダー研究における被差別対象の女性や母性という視点で描かれることが多く、また、幸運や異界のシンボルとされてきた被膜児伝説の研究は、世界的にも非常に少ない。わずかに、被膜児伝説に関する記載が比較的多いイギリスにおいて、新聞広告に記載された羊膜販売広告の記事紹介が行われているだけで、その概念変遷や医療技術発展との相関性についての分析は皆無である。

そこで、古来、さまざまな文献に被膜児描写があり、18･19 世紀に産科医療が飛躍的に発達し、その当時の産科医療先進国であったという共通点のある日本およびイギリスを研究対象国とし、18・19 世紀の産科医療の発展、被膜児伝説の分布とその概念、宗教的・世俗的生命観の３つの視点から、両国における被膜児という特殊出生児の伝説に表れた生命観を読み解き、産科医療の向上とその社会受容とともに、伝説がどのように変化していったのか、医療技術との相互影響による文化変容および宗教的・世俗的生命観の変遷を分析し、それを国際発信することを研究目的とした。具体的目標としては、⑴被膜児に対する概念変遷に見る産科技術の社会変容と生命観変化の分析、⑵文字資料をはじめとする多種多様な研究媒介の使用、⑶進捗状況に応じた研究成果の逐次発信の 3 点である。

⑴被膜児に対する概念変遷に見る産科技術の社会変容と生命観変化の分析
日英両国の当該時期の被膜児伝説および関連記載事項を医薬書、文芸作品、民間伝承、新聞などから収集し、被膜児に対する概念変遷から生命観変遷を抽出した。その生命観変遷に産科技術向上が影響を与えていたのか、与えていたのならばどの程度のインパクトがあったのか、また、宗教・生命観と産科技術向上の相互影響を分析した。

⑵文字資料をはじめとする多種多様な研究媒介の使用
研究媒体：医薬書、文芸作品、民間伝承、絵画、美術工芸品、歌謡、宗教遺物など
歴史学全般で文字資料以外を軽視する傾向があるが、医薬は実生活との関連性が強い社会文化事象の１つであり、概念や思想（宗教）とも相互に影響しあうものである。文字資料のみならず、美術品や日用品、諺などにも医薬知識や生命観が意匠や概念という形で表れていると考えられるため、当該時期の創作品を含めた非文字資料も研究媒体として使用し、媒体としての価値の高さを提起した。

⑶進捗状況に応じた研究成果の逐次発信
世界的に被膜児伝説の総合研究は未踏であるため、研究の布石となるよう国内外の学会で発表し、研究対象や研究媒体としてタブー視されがちな被膜児や伝説の文化的価値、研究の発展性を発信した。また、将来的に、ドイツ・ポーランド・オランダなど、イギリスに次ぐ数量の被膜児伝説を有する諸地域での被膜児伝説研究をおこなうための人的ネットワークの形成・拡大にも努めた。

３．研究の方法

歴史学全般で、「史料」と呼ばれる文字資料以外は軽視されるきらいがあるが、医薬は実生活との関連性が強い社会文化事象の１つであり、時には概念や思想・宗教とも相互に影響しあうものである。よって、文字資料のみならず、美術品や日用品、諺などにも医療知識や生命観がさまざまな形で表されていると考えられるため、本研究では創作品を含めた非文字資料も研究媒体として使用した。

具体的な方法は、⑴資料探索（医薬書や民間伝承、童話、新聞記事、広告、宗教遺物など被膜児関連物を収集・抽出し、被膜児の付帯概念や生命観に対する産科技術の影響を分析する）、⑵被膜児伝説聞き取り調査（被膜児伝説および関連伝説の聞き取り調査をおこない、被膜児に対する概念を分類、それを医療環境および地理的条件と比較検討する）、⑶産科習俗調査（出産の場所や禁忌、胎児附属物の処理方法など、産科習俗を調査する）、⑷研究成果公表（研究の進捗状況に応じて、国内外の学会で成果発表をし、将来の研究基盤となる人的ネットワーク形成に努める）の４つである。

なお、各種調査は、主に被膜児伝説の存在が記載されている都市・地域を選択した。国内では北陸・中部（石川・富山・岐阜）や関西・東海（兵庫・三重）、北海道（道東、道央および道南）そして東京、イギリスではイングランド（ロンドン・オクスフォード・カンタベリー）、スコットランド（アバディーン・グラスゴー・エディンバラ）、ウェールズ（カーディフ・スウォンジー）の各都市・地域で実施した。

⑴資料探索：18・19 世紀の医薬書や民間伝承、童話、文芸作品、新聞記事・広告、美術工芸品、宗教遺物、また、柳田邦夫の『遠野物語』や J.G.フレイザーの『金枝篇』のような 20 世紀以降に編纂された民俗学関連書の記載も含めて、被膜児に関する記述や意匠を抽出し、その付帯概念や、薬種としての羊膜の使用・保存方法などの変遷を分類し、産科技術の発展との相関性を比較分析した。

⑵被膜児伝説聞き取り調査：被膜児および関連の伝説の聞き取り調査をおこない、伝説中に描かれた被膜児の付帯概念を分析・分類し、当該地域と周辺地域における産科医の開業の有無とその場所、社寺・教会などの宗教施設の有無とその場所、河川や湖沼、自生薬草の有無とその種類など、医療環境および地理的条件と比較検討した。なお、調査は伝説の内容（被膜児の羊膜を持っていると溺れない、被膜児はシャーマンになる、等）を対象とした。

⑶産科習俗調査：妊娠前から出産後までのまじないや飲食摂取制限に代表される言動禁忌、出産形態やその場所、助産方法、羊水・臍帯・羊膜など胎児附属物の処理方法や薬種としての使用の有無、父親の役割、男女の概念など、調査対象地域・地区に伝わる産科習俗を調査し、⑵被膜児伝説聞き取り調査と同様、医療環境および地理的条件と比較検討し、被膜児伝説の概念分類との相関性を分析した。

⑷研究成果公表：研究の進捗状況にあわせて、医学史・薬学史の国際会議や国内の科学史学会などで成果発表をした。研究期間を通して、国内外の各種学会大会に参加して最新の研究動向を探るとともに、国内外の医薬史研究者とも密に連絡をとることで、将来、被膜児伝説のグローバル研究が遂行できるよう人的ネットワークの形成にも努めた。

４．研究成果

被膜児伝説信仰の衰退の社会文化的背景として、⑴日本では産科技術の向上およびその一般化が、⑵イギリスでは産科医療技術の影響以上に、船舶技術の向上による海上交通の安全化および鉄道交通網の発達が、それぞれ存在することが判明した。従来の研究では、現存資料の少なさゆえに、日英ともに被膜児伝説信仰の衰退要因研究はなされてこなかったが、本研究で日英それぞれの信仰衰退の一要因を明らかにすることができた。

⑴まず、日本においては、識字率の高さゆえに医薬書が医療従事者だけの特殊な書物ではなく、一般階級の人にとっても啓蒙書としての役割を果たしていた。これは、産科医療技術に関する記述が、その開発や向上から時を置かずして、後年に発行された医薬書はもちろん、法書や女性用啓蒙書に転記されていることからもわかる。そのため、被膜児をはじめとする異常出産に対する、当時の社会において流布していた蔑視や誤った概念を正す記載内容および胎児の情報が、わかりやすい平易なことばで、産科医療技術の発達とともに、その量・正確さを増していった。特に、都市部から離れた地方では、医師数が少なく、産婆（取り上げ婆）が代わりに活躍していたため、無学者の多かった産婆でも読めるようにほぼ全文平仮名で書かれた助産書が刊行されていることから、当時の日本では医療情報が文字という媒体を通して短時間で広がり定着していったこと、さらに、それが民間で流布していた迷信や概念までをも駆逐していったことが読み取れた。

また、時代は変わるが、中世において、羊膜の胎内での役割に恃んでか、武具としての使用を示唆する記述が確認できた。これについては、引き続き、その内容を検証していく。

⑵一方、イギリスであるが、被膜児および羊膜そのものに関する記述は日本以上に数多く残っているものの、庶民層の識字率が高くなかったため、日本のように医薬書が啓蒙書の役割を果たすのはもう少し時代が下がってからになる。そのため、産科技術ではなく、ほかの技術発展が水難除けのお守りとしての羊膜の概念を変えていったと考えられた。結果、19 世紀以降の、船舶技術の向上やライフジャケットの性能改善による海上交通の安全化と鉄道交通の発達が、その背景にあることが推察できた。イギリスから欧州大陸、および北米大陸への移動が比較的安全になり、かつ、旅行代理店の出現によって、当時非常に高価だった鉄道旅行が手の届く娯楽へと変化し、多様な移動手段が出現し、行動範囲が拡大するとともに、人々の水に対する畏怖が払拭された。水難事故が数量的に減少した結果、被膜児や羊膜への信仰が薄れ、概念そのものも忘れ去られていったと推定できた。
このイギリスにおける交通技術の発展と被膜児伝説の衰退の相関性についても、他の傍証の検討を含め、引き続き、検証していきたい。

日英の両国において、博物館や資料館、薬草園、図書館、宗教施設等に収蔵されている産科医療や産科習俗に関する文物やその詳細についての調査、および産科習俗や被膜児伝説、伝統的な新生児医療に関する聞き取り調査を行ったが、イギリスでは、伝承そのものがすでに絶えており、かつそれぞれの地域の象徴的な歴史や文化を観光資源として使用しているためか、観光に結びつかない文化や資料が駆逐されている感があった。また、国内では、聞き取り調査に関しては、性風俗と結びつくため実施そのものができないこともあっただけでなく、伝統的な産科習俗に詳しい古老が亡くなっていることも多かったため、文献調査の内容を確認する形での聞き取り調査で代用することが多かった。
両国ともに、関連遺物はごく少数ながら残ってはいるものの、被膜児伝説に関する信仰は現在伝承されておらず、産科習俗についてはイギリスでは文献に記載されていること以外は不明、国内では集落・市町村の合併や住民の移動等に習俗の散佚、習俗の相違と周辺集落の歴史的社会問題の関連性がわずかに見いだせたにすぎなかった。
しかしながら、イギリスでは、ライフジャケットおよび船舶技術の発達と、鉄道交通網の発達による物資運搬の簡易化、海上交通の安全化、および旅行業の興隆が被膜児伝説の信仰衰退に拍車をかけたことがわかり、また、国内では本研究の対象年代とは異なる中世において、羊膜に武具としての機能および信仰が見出されていたことを示唆する文献が見つかったため、イギリスにおける被膜児伝説と交通技術の関連性についてさらに掘り下げていくとともに、国内における武具としての羊膜と生命観の変転の解明について、引き続き、課題として取り組んでいく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Hanna Uchino	４．巻 1
２．論文標題 Caul Related Superstitions in Japan Yedo Period	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Conference Proceedings ICOAH 2016 3rd International Conference on Arts and Humanities	６．最初と最後の頁 33~ 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.17501/icoah.2016.3106	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 内野　花
２．発表標題 江戸時代における新生児への投薬
３．学会等名 第65回日本科学史学会年会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hanna Uchino
２．発表標題 Culture Related to the Maternity Sash for Expectant Women in Japan
３．学会等名 The 46th International Congress for the History of Medicine（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hanna Uchino
２．発表標題 Makuri- a Decoction for a Newborn Baby in Japan Yedo Period
３．学会等名 The 43rd International Congress for the History ofPharmacy（第43回国際薬史学会大会）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hanna Uchino
２．発表標題 Caul Related Superstitions in Japan Yedo Period
３．学会等名 3rd International Conference of Arts and Humanities（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考